

■ ばか苗病の防除には、適切な種子消毒と環境衛生の徹底が重要です

ばか苗病菌は種籾や被害わらで越年し、種子予措中に感染します。前年にばか苗病が発生した場合は、ばか苗病菌が籾殻や米ぬか、粉塵等に付着している恐れがあるため、適切な種子予措だけでなく、作業施設の掃除も徹底しましょう。

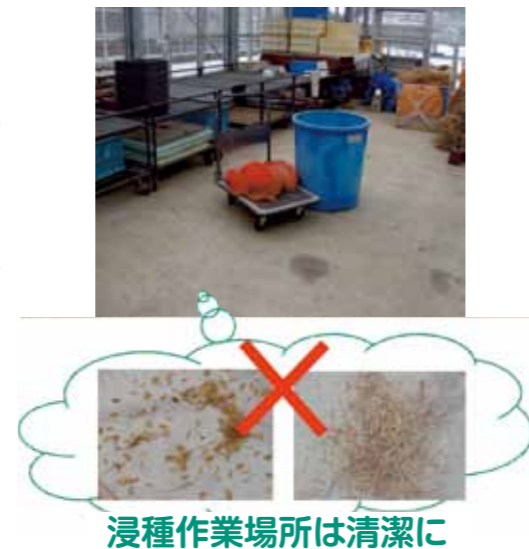
1. 種子消毒の効果を発揮させるための適切な種子予措

- ① 種子消毒時や浸種開始時にお湯で水温が15℃になるように調整してください。
- ② 浸種水温10～15℃で薬剤防除効果が高いので、浸種は水温10℃を確保できる4月中旬以降から開始してください。
- ③ 浸種水量は種子1kg当たり3.5リットル（種子50kg当たり175リットル）です。
- ④ 浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換はやめましょう。
- ⑤ 浸種期間は浸種水温10℃の場合で6日間程度とし、水の交換は2～3回とします。
- ⑥ 複数の品種や消毒方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種、催芽しないでください。
- ⑦ 催芽温度は30～32℃としてください。



2. 周辺環境からの感染を防ぐための環境衛生

- ① 種子予措をする予定の作業施設やその周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等を除去し、清掃してください。
- ② 消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かないでください。また消毒後の種子を載せるパレットやシート等は清潔なものを用いてください。
- ③ 浸種時、催芽時は容器に蓋をしてください。
- ④ 浸種、催芽で使用する機器や容器は、品種や防除方法が変わるごとに十分に洗浄してください。
- ⑤ 循環催芽は発病を助長する場合がありますので、催芽器内に桶を入れるなどして、種籾のまわりの水を循環させないようにしてください。
- ⑥ 無加温育苗の場合、出芽までの期間が長びくと発病が多くなりやすいため、被覆資材等による保温に努めてください。また出芽後の再被覆やめましょう。



3. その他の注意点

- ① 温湯浸漬処理による種子消毒は、単独では化学合成農薬に比べると効果が劣るため、生物農薬（タフブロック、エコホープDJ）と組み合わせてください。



病害虫雑草防除は収量品質の向上につながります。 ～ 生態を理解し、適期防除を～

■ フタオビコヤガの防除について

ここ数年、フタオビコヤガ（イネアオムシ）の発生が多い傾向にあり、去年は上位葉の食害によって減収したほ場も見られました。

フタオビコヤガは稲わらや雑草などでサナギの状態越冬します。越冬世代成虫は5月中旬～6月上旬に発生し、育苗ハウスや早植田に飛来します。年に3～4回発生しますが、成虫の産卵、孵化、幼虫の生育には曇天雨のような多湿条件が好適で、丘陵や山林で囲まれた風通しの悪いような水田での発生が多い傾向にあります。

幼虫がイネを食害し、孵化当初はかすり状に、生長すると葉縁から階段状に食害します。生長が進むにつれ食害量が急激に増えるので、注意が必要です。

昨夏に成虫が多かったほ場では、越冬世代が多いと予想されるので、フェルテラ箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤など、長期間の残効が期待できる剤で防除しましょう。



越冬世代成虫（約1cm）

老齢幼虫（約2cm）

かすり状の食害痕

階段状の食害

対策薬剤例

	薬剤名	希釈倍率・使用量	散布時期	備考
育苗箱施用	フェルテラ箱粒剤	50g/箱	床土混和 又は 播種時覆土前～移植当日	前年多発したほ場で使用する
	ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	移植3日前～移植当日	
茎葉散布	トレボン粉剤DL	3kg/10a	第1世代 5月下旬から6月上旬 第2世代 7月上旬 第3世代 8月上旬	

■ いもち病の防除には育苗期防除が重要です

本田におけるいもち病発病の主な原因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。また、乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻も伝染源になります。

本田での葉いもち、穂いもち防除のためには、育苗施設から稲わら・籾殻を撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期いもち防除を行うことが重要です。

1. 薬剤による防除法

- (1) 種子消毒は必ず行いましょう。防除効果を高めるため、浸種水温が10～15℃になるよう努めましょう。
- (2) 育苗期いもち防除は下表の薬剤で必ず実施し、育苗施設から本田への感染・発病苗の持ち込みを防ぎます。
- (3) Dr.オリゼプリンスエース粒剤の出芽後～1葉展開前処理は育苗期いもち防除と本田の葉いもち防除を兼ねます。
- (4) 嵐プリンス箱粒剤6（50g／箱）の床土混和又は播種時（覆土前）～1葉展開前の散布処理は育苗期いもち防除と本田の葉いもち防除を兼ねます。

2. 耕種的防除

- (1) 育苗施設の近傍や施設内に稲わら・籾殻を置きません。
- (2) 育苗施設内の通風不良、日照不足、被覆期間の過剰、過繁茂、田植えの遅延は発病を招きます。
- (3) 育苗期間に1個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設の苗の移植はやめましょう。

育苗期いもち防除剤

薬剤名	使用時期	箱当たり使用量	備考
ベンレート水和剤	播種時～播種7日後頃	500倍液 [500ml]	かん注
ビームゾル	緑化始期	1,000倍液 [1,000ml]	かん注
嵐プリンス箱粒剤6	床土混和または播種時(覆土前)～1葉展開前	50g	混和又は散布
Dr.オリゼプリンスエース粒剤	出芽後～1葉展開前	25～50g	散布

※ビームゾルは使用時期が遅れると葉先が黄化する薬害を生じる。

※ベンレート水和剤の播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープD Jの防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

※嵐剤の床土混和処理や播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープD Jの防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

※耐性菌対策のため、嵐剤の50g箱処理は、採種ほに隣接する地区では行わない。

■ 除草剤を効かせるポイント

ここ数年、ほ場の残草が目立ちます。特にノビエ、ホタルイの残草は斑点米カメムシ類の水田への侵入・増殖の原因となることから、雑草防除は重要です。

(1) ほ場の準備

- ・耕起・代かきを丁寧に行い、水持ちを良くします。
- ・田面の均平化に心がけます。部分的な田面露出・浅水や深水による効果不足や薬害リスクの軽減に繋がります。
- ・ねずみ穴を早めに確認し、くろ塗りや畦畔シート等で漏水を防ぎます。

(2) 適正な苗の植え付け

- ・植え付け不良、極端な浅植えは薬害が発生しやすくなります。
- ・代かきから田植えまで日数を置きすぎると植え穴の戻りが悪くなり、薬害が発生しやすくなります。
- ・軟弱苗は薬害が発生しやすくなりますので、健苗の育成を心がけましょう。

(3) 適期散布

- ・ラベルの使用時期に記載されている「ノビエ〇葉まで」は、ノビエの最大葉齢を示していません（平均葉齢ではありません）。タイミングを逸しないよう、遅くともラベルの使用時期より0.5葉早く散布するよう心がけましょう。

(4) 水管理の徹底

- ・湛水散布の場合は、水口・水尻をしっかり止め、水深3～5cmで散布します。
- ・ジャンボ剤や豆粒剤など自己拡散する除草剤の場合、水深が浅いと拡散不足になるので、水深5～7cmで散布します。
- ・カナ・表層剥離が多発生すると拡散不足になるので、発生前に散布します。

(5) 環境に配慮した使用

水田で除草剤を使用する場合、河川や湖沼への流出による悪影響を防ぐため、畦畔の整備や止水期間の遵守などが使用者に求められます。また、効果的な薬剤使用の面からも、漏水を防止し、散布後7日間は落水や掛け流しをしないことが大切です。

初期除草剤の移植前処理イメージ



※使用方法を誤ると農薬取締法違反（使用基準の逸脱）になりますので、注意してください。

※秋田県では水田初期除草剤の移植前処理は行わないよう指導しています。やむを得ず、移植前処理をする場合は、止水期間7日間を遵守しましょう。